

上条 報告

第27号
平成23年8月

甲州市教育委員会
☎32-5097

茅葺切妻造民家の古例

旧廣瀨家住宅について

旧廣瀨家住宅は、神奈川県川崎市の生田緑地公園内にある、川崎市立日本民家園に所在します。

日本民家園は、急速に消滅しつつある古民家を永く将来へ残すことを目的として、昭和四十二年に開園した古民家の野外博物館で、民家をはじめ水車小屋・船頭小屋・農村歌舞伎舞台など二十五棟を、約五十四万坪の園内に移築公開しています。

民家は神奈川を中心とした関東が多いのですが、北は岩手、南は鹿児島のみ家もあります。園内は「東北の村」「神奈川の村」「関東の村」「信越の村」「宿場」に分けられ、各地域の民家が配置されており、そのうち八棟が国の重要文化財に、十棟が神奈川県重要文化財に指定されています。

旧廣瀨家住宅は、関東の村のエリアに昭和四十四年に移築・復元されました。もともとは塩山上萩原の中子沢に所在した建物で、移築以前は突き上げ屋根を持つ形態に改造されていました。日本民家園では、移築時に詳細な調査を行っており、組立も現状変更をして建築当初（十七世紀後期・三一〇年以上前）の姿に復元しました。

甲州市や峡東地域にはまだ多くの茅葺切妻造民家がありますが、旧廣瀨家は県外にあって、もっとも古い甲州民家の姿を伝えているのです。

●旧廣瀨家住宅について

旧廣瀨家住宅の構造形式は、次の通りです。

桁行八間、梁間四・五間、一重切妻造、茅葺、平入、前面葺き下し下屋

移築前の姿は屋根の中央上部に突き上げ屋根をもつ、よくみられる切妻造民家でしたが、調査を経て復元された姿は、とても簡素なものです。

正面は一重で単調な茅葺屋根が目立ちます。屋根の軒はとても低く、一・六メートルほどしかないため、大人ならくぐらなければ中に入れません。開口部も出入口とザシキにあるだけです。

両側面と背面は、もつと簡素です。明り取りのための小さな窓が数箇所あるだけで、出入ができる開口部はありません。両側面の妻壁には柱が露出しています。普段見慣れた製材による規則的な構架―直交する太い梁と棟持柱や、一定間隔で横に入る化粧貫など―ではなく、

曲がった自然の柱による不思議なモザイク模様にもみえます。

同じ茅葺切妻造民家なのに、どうしてこんなにも外観が異なっているのでしょうか。それは、当時の産業に大きく関係してきます。



旧廣瀨家住宅の正面。屋根の葺き下ろしが低く、その分屋根が大きくみえます。



右側面(上)と左側面(下)。



正面・右側面と背面・左側面。正面の屋根が低いのは、下屋が出ているから。

突き上げ屋根がないということは、建築当時は養蚕が盛んではなかったということです。養蚕の発展に伴い進化した切妻茅葺民家は、突き上げ屋根も、棟持柱も、妻壁の柱の意匠も、すべて養蚕に結び付けて説明することができそうですが、古い姿に戻された旧廣瀨家住宅には、それが当てはまりません。

突き上げ屋根も棟持柱もない、養蚕以前の茅葺切妻造民家の姿を伝えている旧廣瀨家は、甲州民家の調査のうえで必要不可欠な貴重な民家です。

●旧廣瀨家の内部

旧廣瀨家の内部をみてみましょう。内部は外観にも増して簡素なつくりで驚いてしまいます。

入口付近は広いドジ（土間）で、面積の約半分を占めています。ドジの隅にはウマヤ（馬屋）があります。

ドジに接してイドコがありますが、イドコには床を張っておらず、ドジにムシロを敷いたようなものです。炉は二か所にあります。いわゆる地床炉です。

イドコに接して、板壁や建具で仕切られたザシキ・ナカナンド・オクナンドの三室が縦に並んでいます。

三室とも板間で、開口部はザシキにしかなく、非常に閉鎖的な空間です。

二階は、ドジの上部に柵状の床が張られているだけで、作業場ではなく物置として使われていました。

●旧廣瀨家の構造「四つ建て」

ドジに前後に並んで立つ二本の柱は、現在の切妻造民家ではみられないものです。通常は、この柱の中間に太い柱が一本立っているか、上条集落の場合では後方の柱に近い位置に一本立っているかです。

この二本の柱は、切妻造民家の古式を示す「四つ建て」という構造によるものです。

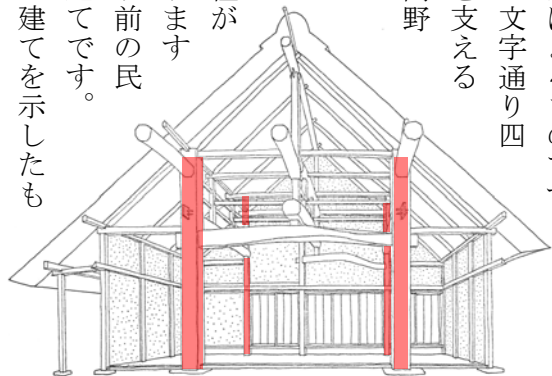


イドコからドジをみたところ。2本の柱が立つ以外は何も空間。

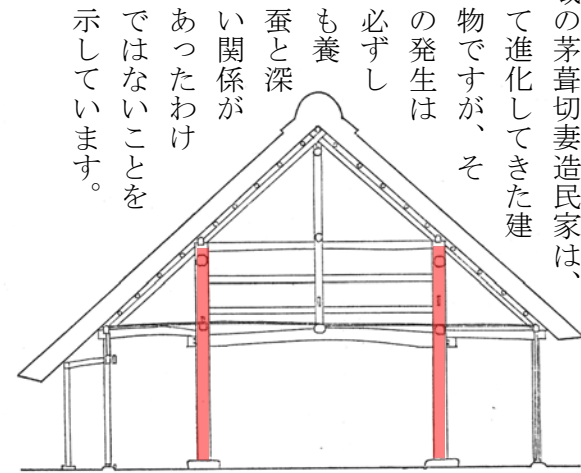


ドジからイドコをみたところ。イドコは床がないため低く、ドジと同じ高さです。奥にザシキが見えます。

四つ建ては、文字通り四本の柱で建物を支える構造です。旧高野家住宅（甘草屋敷）のように、十九世紀の民家は棟持柱が主要構造となります。が、棟持柱より前の民家構造が四つ建てです。下の図は四つ建てを示したものです。屋根の棟を支える棟持柱ではなく、ドジに二本の柱を立て、その柱を梁でつなぎます。イドコ・ザシキ境にも同じような柱を立て、互いを桁でつなぎ主要な構造としています。その構造上、天井部は桁や梁や束が乱立するため、二階の空間を確保することができず、旧廣瀨家のようにドジの上部に柵状の床が張られるのが精一杯だったようです。峡東地域の茅葺切妻造民家は、養蚕によって進化してきた建物ですが、その発生は必ずしも養蚕と深い関係があつたわけではないことを示しています。



上野家住宅（山梨市）にみる四つ建て構造。上野家は県内最古の民家で、旧廣瀨家よりまだ古い17世紀前期とみられます。



旧廣瀨家住宅の梁間断面図。右の上野家住宅の断面図とよく似ています。二本の柱を梁でつないでいることがわかります。

●旧廣瀨家とよく似た民家

実は上条集落の中に、旧廣瀨家と良く似た民家があります。中村太丸さん宅です。

太丸さん宅は、ドジに八角に加工された大黒柱が棟の真下に立てられています。この柱は後補のもので、大黒柱の背後にある柱と、チュウナンド・オクナンド境にある柱が当初の四つ建ての柱です。

太丸さん宅の調査後の復元平面図と、旧廣瀨家住宅の平面図を並べてみました。上が太丸さん宅です。四つ建ての柱を赤く表示しています。その位置も、間取りも、驚くほどよく似ていることがわかります。

太丸さん宅は、言い伝えで「富士山の噴火の頃には建っていた」とされていますが、富士山の最後の噴火は宝永四年（一七〇七・十八世紀初め）です。平面図の比較のとおり、太丸さん宅は十七世紀後期の旧廣瀨家と同時期とみられるので、建築時期は言い伝え通り富士山の噴火より前、十七世紀後期と思われる。

このように、個々の民家を比較していくことで、より多くの情報を得ることができそうです。

このように、個々の民家を比較していくことで、より多くの情報を得ることができそうです。

